様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００９８

研究課題名（和文）アウグスティヌスにおける聖書解釈の理論と実践

研究課題名（英文）The Theory and Practice of the Scriptural Exegesis in Augustine

研究代表者
上村　直樹（KAMIMURA, Naoki）

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：４０５３５３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代末期のキリスト教思想家であるアウグスティヌスの聖書解釈、とくにその思想の成熟期にさきだって著された「創世記」とパウロ書簡に関する註解書を分析することによって、アウグスティヌスの聖書解釈の実態を解明するとともに、その解釈法が人間論、ならびに言語理論と密接に関連していることを示した。これによって、アウグスティヌスの思想が聖書解釈の実践によって深化する過程が実証されるとともに、古代末期の聖書解釈学が、言語や人間の本質についての理解を包括していることが明らかにされた。本研究は、海外研究協力者、またアジア環太平洋地域の研究者との相互交流のなかで遂行され、その研究成果を国内外に発信した。

研究成果の概要（英文）：This research project explores the details of the scriptural exegesis in Augustine of Hippo, one of the most influential of the ancient Christian interpreters of the scriptures, particularly in his commentaries on the Pauline epistles and the book of Genesis, during the period between his conversion in Milan (386) and his ordination as bishop of Hippo (396), thereby attending to a crucial question of how he determines a close correlation between the exegesis and the anthropological and linguistic theory from contemporary viewpoints. It is noteworthy that the ancient exegesis includes a comprehensive understanding of the nature of language and the human beings. This research has been stimulated by the growth of international collaborations between the Asia-Pacific and Japanese patristic scholars.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：アウグスティヌス　キリスト教　聖書解釈　パウロ　教父　人間論　言語　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

古代の教父が取りくんだ聖書解釈について、1950 年代前半にはその体系的な見取り図を作成することがほぼ不可能とみなされていた。しかし、1960 年代末期から研究領域として創出されはじめた「古代末期 (Late Antiquity)」の社会的、文化的、経済的な環境についての研究の進展とともに (Cf. G. Bowersock, P. Brown and O. Grabar (eds.), *Late Antiquity: A Guide to the Post classical World*, Cambridge, MA 1999)、学術研究として確立しはじめた。現在私たちは、7 世紀ごろまでの古代教会のなかで、聖書本文がいかに成立し、伝承され、流布し、解釈されてきたかについての多くの知見を共有するにいたっている (Cf. C. Kannengiesser *et al. Handbook of Patristic Exegesis*, 2 vols. Leiden 2004)。古代教会の聖書解釈者に多大な影響を与えたアウグスティヌスの聖書解釈学についても、その解釈法の特徴や、東西教父の伝統からの影響、ドナティスト派ティコニウスなど同時代の解釈理論との関係についての研究が推進されている。

近年のアウグスティヌス研究においては、主著『告白』 (397-401 年頃執筆) にさきだつ 5 年ほどのあいだの思想の展開が注目されている。この短い期間のなかに、成熟期のアウグスティヌスの思想の萌芽と、失われた可能性をさぐる研究が提起されはじめたからである (Cf. P. Brown, *"New Directions"*, in *Augustine of Hippo.* Berkeley 2000: 489-490)。とはいえ、聖書解釈の実態について、この時期の思想の展開との関連に着目する研究は依然としてかぎられている (Cf. E. Plumer (ed.), *Augustine's Commentary on Galatians.* Oxford, 2003)。

本研究の研究代表者・上村直樹は、さきにアウグスティヌス初期の「創世記」解釈の実態を考察し、『マニ教徒に対する創世記註解』や『未完の創世記逐語註解』のうちに成熟期の聖書解釈にいたる萌芽が、その方法にも、またそれにかかわる人間理解においても認められることを明らかにした ("Augustine's First Exegesis and the Divisions of Spiritual Life", *Augustinian Studies* 36, 2005: 421-432; "Augustine's Scriptural Exegesis in *De Genesi ad litteram liber unus inperfectus*", *Studia Patristica* 49, 2010: 229-234)。また、研究分担者・佐藤真基子は、聖書解釈の原理を論ずる主著『キリスト教の教え』(397 年頃執筆開始) の検討を皮切りに、その原理をささえる言語理論がいかに形成されてきたかを考察した。そして、その理論の萌芽が、先行する著作『嘘について』(394 年) のうちに人間の「原罪」論とのかかわりにおいて認められること(「『心の口』で語るとはいかなることか―アウグスティヌス *De mendacio* における」『中世哲学研究』26, 2007: 62-73)、また、同時期の『ガラテヤ書註解』(パウロ書簡註解のひとつ) との心のあり方に関する用語上の一致を明らかにした。そこで、これら両名の研究成果、また、Eric Plumer の研究をふまえつつ、本研究は、アウグスティヌス研究における欠落を埋めるべく立案された。主著『告白』の成立にさきだつ期間におけるアウグスティヌスの思想の展開を、この時期に取りくんだ聖書解釈との関連を検討することによって考察することを目指して、着手された。

２．研究の目的

主著『告白』や『キリスト教の教え』に先行する時期のアウグスティヌスの著作群は、「創世記」や「詩篇」、福音書やパウロ書簡に関する註解書のほかに、哲学的・神学的著作、説教、書簡など多岐にわたっている。本研究は、『告白』、『キリスト教の教え』にさきだつ約 5 年という短期間に焦点をしぼることによって、アウグスティヌスの聖書解釈の技法を具体的に分析するとともに、その解釈と思想形成との関わりを包括的に解明することを目的とする。本研究の研究代表者・上村は、すでにアウグスティヌス初期の「創世記」註解についての研究を進めてきたので、これまでの研究成果を踏まえたうえで、『未完の創世記逐語注解』(393 年) に前後する時期の著作や説教、書簡から網羅的に「創世記」解釈を洗いだすとともに、『ガラテヤ書註解』『ロマ書選釈』『ロマ書未完註解』などのパウロ書簡註解書の実態解明にとりくむ。また研究分担者・佐藤は、『嘘について』のなかにアウグスティヌス成熟期の言語理論、人間論の萌芽を見出した研究を引きついで、それらの理論がこの時期の聖書解釈、とくに「創世記」解釈とどのように関連し、展開しているかを検証する。

本研究の課題を達成するために、研究代表者と分担者が共同してとりくむ課題は、つぎの 3 点にまとめられる。

課題 1: アウグスティヌスは「創世記」およびパウロ書簡をどのように解釈したのか。

課題 2: 『嘘について』に前後するアウグスティヌスの言語理論が、どのように変化したか(あるいは変化しなかったか)。

課題 3: 人間論はいかに展開したか（あるいはしなかったか)。

両名はそれぞれの研究から得られた知見を共有することによって、「創世記」とパウロ書簡という成熟期の聖書解釈にとってもっとも重要な聖書テキストを解釈する営みが、言語と人間についてのアウグスティヌスの思想の形成と深化に連動していく過程の解明を目指した。

３．研究の方法

本研究において焦点をあてる 390 年代中期から後期は、アウグスティヌスがはじめて教会の指導者に就いた時期であり、その著作活動は、哲学的・神学的な探求にとどまらない

多様な様相を見せはじめている。そのため、本研究では、コンピュータデータベースを駆使してこの時期のテキストを網羅的に調べることで、抽出した聖書解釈についての議論の分析を進めた。とくに上村は、それらのテキストとおなじ時期に著された聖書註解書との関連を検証することによって、聖書解釈の実態を解明することにとりくんだ。佐藤は、すでに着手している『嘘について』の分析を手がかりに、『教師論』から『嘘について』、そして『告白』へと展開するアウグスティヌスの言語理論の変化の可能性を分析した。そのうえで、その言語理論の展開が同時期の聖書解釈とどのように連関しているかについて検証した。

両者の研究は、研究経過を共有し、意見を交換する機会を緊密に設けることによって、当該時期の聖書解釈の実態を包括的にとらえることを目指すとともに、それぞれの分析結果を相互に参照し、修正をくわえながら進められた。同時に、海外研究協力者とも研究の途中経過を共有し、意見を交換することによって、国際的に開かれた研究の進展を目指した。研究の成果は、国内外の学会における研究発表、および論文発表において、国内外に発信した。

４．研究成果

⑴ 平成 23 年度

研究初年度にあたって両研究者は、研究計画にあげた課題 1「アウグスティヌスが、「創世記」とパウロ書簡をどのように解釈したのか」と、課題 2「『嘘について』に前後するアウグスティヌスの言語理論が、どのように変化したか（あるいは変化しなかったか）」を考察することに着手し、その成果を国内外の学会において発表した。また、これまでの研究成果を公刊することによって、今後の研究の方向を明確にすることにとりくんだ。

研究代表者・上村は、5 月にフレデリクトンで開かれたカナダ教父学会の年次研究集会において、「創世記」1:26-27 解釈の問題性について発表し、本研究計画が対象としている『告白』先行段階において、アウグスティヌスがすでに「創世記」冒頭解釈の基本的な枠組みを構築していたことを明らかにした（学会発表 1）。さらに、8 月イギリス・オクスフォードで開かれた国際教父学研究集会でパウロ書簡解釈に関する発表を行なった（学会発表 2）。本研究は、2013 年刊行の *Studia Patristica* 第 70 号に掲載された（図書 2）。そして、年度末にオーストラリアカトリック大学の初期キリスト教研究センターで開かれた研究集会に参加し、研究の進行状況をレポートするとともに、海外研究協力者 Pauline Allen 教授との意見交換を行なった（学会発表 4）。

研究分担者・佐藤は、アウグスティヌス『嘘について』において展開している「嘘」の成立と人間の志向性を結びつける独自の理解が、『告白』では「嘘」から免れない者としての人間観へ深化し、そのキリスト論の確立に影響していることを明らかにした。そして、その成果を『中世思想研究』第 53 号に投稿・公刊した（雑誌論文 1）。さらに、アウグスティヌス初期から中期にいたる言語理論の発展が、そのキリスト論に密接に関係していること、また人間の言語的営みが救済に寄与していることを明らかにし、11 月福岡市で開かれた中世哲学会大会において発表した（学会発表 3）。

⑵ 平成 24 年度

研究第 2 年度において両研究者は、研究計画にあげた課題 1「アウグスティヌスが、「創世記」とパウロ書簡をどのように解釈したのか」と、課題 2「『嘘について』に前後するアウグスティヌスの言語理論が、どのように変化したか(あるいは変化しなかったか)」の検討を継続し、その成果を国内外の学会において発表するとともに、課題 3「人間論はいかに展開したか（展開しなかったか）」の考察に着手した。

研究代表者・上村は、5 月にウォータールーで開かれたカナダ教父学会の年次研究集会において、パウロ書簡についてのアウグスティヌス初期、中期の解釈を分析した成果を発表した。そして、『告白』に先行する段階で、アウグスティヌスの人間論が古典的、目的論的な人間の完成への階梯論から移行し、恩恵の神的な介入をみとめる救済史的、歴史神学的な枠組みに包摂されつつあることを明らかにした（学会発表 5）。さらに、7 月に韓国ソウルで開かれた「アジア環太平洋初期キリスト教学会」では、『告白』の回心の場面に現れるパウロ書簡解釈の意義を、先行する著作群のなかに検証する発表を行なった（学会発表 7）。あわせて、本研究の成果を紹介するウェブサイトを構築し、研究状況について周知する枠組みを設定するとともに(その他 ホームページ等)、研究の進展にともなって順次ウェブサイトの内容を更新した。

研究分担者・佐藤はまず、万物の生成原理としての「言葉」理解の変化を、初期、中期著作において分析し、アウグスティヌスが、「言葉による創造」というヨハネに由来する考えを、ギリシャ的な形相付与による創造として理解することから出発し、創造者の意図的な発話として捉えるにいたったという思想の展開を明らかにした。そして、『告白』における「創世記」解釈の枠組みを解明したこの研究成果を、7 月に韓国ソウルで開かれた「アジア環太平洋初期キリスト教学会」において発表した（学会発表 6）。さらに、『ガラテヤ書註解』の分析に着手することによって、パウロの言葉と「真理」概念との関係に着目し、アウグスティヌスのこの時期以降の聖書解釈論に反映する「真理」概念が、この関係によって確立していたことを明らかにした（雑誌論文 4）。

(3) 平成 25 年度

本研究の最終年度において、これまでに明らかになった問題を検討するとともに、全体の研究成果をまとめ、10 月にオーストラリア・メルボルンで開かれた初期キリスト教研究学会で発表した。そして、冊子体の英文研究報告書を刊行するとともに、海外研究協力者との共同討議をおこなった。

研究代表者・上村は、5 月にシカゴで開かれた北米教父学会において、対話篇という文学形式について検討し、アウグスティヌスをとりまく共同体における教育のあり方を考察し（学会発表 8)、つづく 6 月のヴィクトリアでのカナダ教父学会において、初期の覚え書きといわれる論考のなかに、すでに枢要な問題の布置が設定されていることを明らかにした（学会発表 9)。

上村と研究分担者・佐藤（10 月から、研究協力者に変更）はともに、10 月にオーストラリア・メルボルンでひらかれた初期キリスト教研究学会において、これまでの研究によって明らかにされたアウグスティヌスの「創世記」解釈とパウロ書簡解釈の実態、また、それぞれの解釈を支えたアウグスティヌスの人間論、言語理論といった思想の展開について論ずる研究発表をおこなった。佐藤はとりわけ、「創世記」解釈を初期の註解書において救済論的な視点から考察し、上村は、主著『告白』におけるアウグスティヌスのパウロ書簡との出会いの意義を、とくに「回心」についての記述のなかに考察した（学会発表 10、11)。

両者はこの発表をふまえ、11 月以降、英文研究報告書を刊行すべくその準備に着手し、これまでの研究発表を再考し、その内容を必要に応じて加筆、修正した。そして、平成 26 年 3 月には報告書を刊行するとともに（図書 3)、オーストラリア・ブリスベンでひらかれた共同研究集会に上村が出席し、その概要を紹介した。とくに研究の成果とその意義を論じた報告書の「序論」について報告するとともに、海外研究協力者、さらに研究集会に参加した他のメンバーをまじえた議論のなかで、研究をさらに展開する可能性について検討した（研究発表 12)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

1. 佐藤真基子「アウグスティヌス『告白』第 10 巻における自己欺瞞の理解」『中世思想研究』53（中世哲学会, 2011）59-75.
http://jsmp.jpn.org/jsmp_wp/wp-content/uploads/smt/vol53/59-75_sato.pdf

2. N. Kamimura, “Friendship and Shared Reading Experiences in Augustine”, *Patristica*, supplementary volume 3 (Tokyo: Japanese Society for Patristic Studies, 2011) 69–83.
http://jpnpatristics.wordpress.com/jsps_journal/03_2011/

3. N. Kamimura, “La exégesis bíblica de Agustín en ‘De Genesi ad litteram liber unus imperfectus’”, revista *AVGTINVS* 57 (Madrid: Editorial Augustinus, 2012) 137–142.
http://www.agustinosrecoletos.com/revistas/avgvstinvs/21

4. 佐藤真基子「真理と人間――アウグスティヌス『「ガラテヤの信徒への手紙」注解』における」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』44（2013）87–103.
http://ci.nii.ac.jp/naid/40019631820

〔学会発表〕（計　12 件）

1. N. Kamimura, “The Exegesis of Genesis in the Early Works of Augustine”, Annual Meeting of the Canadian Society of Patristic Studies, St. Thomas University, Fredericton, Canada, 31 May 2011.

2. N. Kamimura, “The Significance of the *Sortes* in Augustine”, 16th International Conference on Patristic Studies, Oxford University, Oxford, United Kingdom, 9 August 2011.

3. 佐藤真基子「言葉と救い―アウグスティヌスにおけるキリスト理解の形成」中世哲学会、西南学院大学、福岡市、2011 年 11 月 5 日

4. Naoki Kamimura “Augustine’s Early Commentaries on the Pauline’s Epistles: Outline of the 2011-2013 Grant-in-Aid for Scientific Research Project”, Annual Meeting of the Center for Early Christian Studies, Australian Catholic University, Brisbane, Australia, 2 March 2012.

5. N. Kamimura, “Augustine’s Evolving Commentaries on the Pauline Epistles”, Annual Meeting of the Canadian Society of Patristic Studies, Wilfrid Laurier University, Waterloo, Canada, 29 May 2012.

6. M. Sato, “The Word and Our Words: Augustine’s View of Words Based on John 1:3”, Asia-Pacific Early Christian Studies Society 7th Conference, Presbyterian Theological and College Seminary, Seoul, South Korea, 6 July 2012.

7. N. Kamimura, “Augustine’s Interpretation of a Passage from Romans

in His Early Works", Asia-Pacific Early Christian Studies Society 7th Conference, Presbyterian Theological and College Seminary, Seoul, South Korea, 6 July 2012.

8. N. Kamimura, "What Augustine Suggested: The *dramatis personae* of the Cassiciacum Dialogues", North American Patristics Society 22nd Annual Meeting, Holiday Inn Chicago Mart Plaza, Chicago, USA, 24 May 2013.

9. N. Kamimura, "Augustine's Understanding of the Soul, the Immortality, and the Being in *De immortalitate animae*", Annual Meeting of the Canadian Society of Patristic Studies, University of Victoria, Victoria, Canada, 5 June 2013.

10. M. Sato, "The Role of Eve in Salvation in Augustine's Interpretation of Genesis chapter 3", Early Christian Centuries 1, Australian Catholic University, Melbourne, Australia, 3 October 2013.

11. N. Kamimura, "Augustine's Quest for Perfection and the Encounter with *Vita Antonii"*, Early Christian Centuries 1, Australian Catholic University, Melbourne, Australia, 4 October 2013.

12. N. Kamimura, "Funded Grant-in-Aid for Scientific Research (*Kakenhi*) Project: Scriptural Exegesis in Augustine", Annual Meeting of the Center for Early Christian Studies, Australian Catholic University, Brisbane, Australia, 7 March 2014.

〔図書〕（計　3 件）
1. **上村直樹（訳・解説）**、S. A. **クーパー『はじめてのアウグスティヌス』教文館**、2012**年**.

2. N. Kamimura, "The Consultation of Sacred Books and the Mediator: the *Sortes* in Augustine", in M. Vinzent (ed.), *Studia Patristica,* 70. Proceedings of the XVI. International Conference on Patristic Studies (Leuven: Peeters, 2013) 305–315.

3. N. Kamimura (ed.), *Research Report Grant-in-Aid for Scientific Research (C) 23520098: The Theory and Practice of the Scriptural Exegesis in Augustine,* Tokyo, 2014.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
1.**「アウグスティヌスにおける聖書解釈の理論と実践」**
http://kmmrnk.com/gasr2011/

2. **英語版ウェブサイト**「2011-2013 Grant-in-Aid for Scientific Research」
http://kmmrnk.com/research/2011-2013gasr/

６．研究組織
(1)研究代表者
上村　直樹（KAMIMURA Naoki）
東京学芸大学・教育学部・研究員
研究者番号：40535324

(2)研究分担者
佐藤　真基子（SATO Makiko）
慶應義塾大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：30572078

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)海外研究協力者
アレン　ポーリーン（ALLEN Pauline）
オーストラリアカトリック大学・初期キリスト教研究所・所長
研究者番号：